

# エネルギーは怒りから、地域を繋ぎたい。

愛成学園施設長 片山 泰伸

入所更生施設として40年以上の歴史をもつ愛成学園が、サポートセンター『くりっく』を立ち上げてから、ちょうど一年が来ます。先行投資という形で進めてきた事実があるために、確かに『くりっく』を運営するためのお金の動きに関しては、結構真面目な疑問が投げかけられていました。

しかし私自身、以前の『愛成学園』の運営に関して、施設長になってしまったために、知らなくても良かった事実を知ってからというもの、それは単に『くりっく』という措置外のメンバーに対するサービスの提供は、ほんのささやかな先行投資に過ぎません。以前のお金の使い方に比べれば、本当にささやかなものであり、少なくとも税金というものが、在宅のサービスに流れていることは、圧倒的にまともで、普通のことであると考えられます。

地域のこの東京という大都会にある施設の中で、40年以上の歴史をもつ施設が、税金を使いながらも、単に2つの事業展開しかしていなかった事実を、私自身は、とことん信じられない気持ちで受け止めています。これは確かに犯罪といわれても仕方がない。それは、学園には素晴らしいスタッフが

いるから余計に感じてしまうのです。

今の生活寮のメンバーに触れると、辛くてたまりませんでした。クリスマスイブの夜に、生活寮のメンバーと世話人さん・地域の人・ボランティアの人達とスナックに行き、カラオケを楽しみました。一年前は、施設に暮らしていたことが信じられません。メンバーの歌う『翼を下さい』は聞くに堪えられない声として入ってきました。

「色んなものを失っている。」「時間を返して欲しい。」「これまでの人生を返して欲しい。」「バンバンとききました。でもメンバーは「ありがとうございます。」しか言えないのです。そこでついつい、どうして街の暮らしを進めてこなかったの。メンバーを何と思っていたのかと。知れば知るほど、怒りに繋がってきます。

その時間が『愛成学園』には10年近くもあったのです。しかし今、この10年を取り戻そうと、スタッフが真摯に動いています。端から見ても、その姿パワフルで頼もしいものです。少なくとも、この失われた10年の間に、三つでもいい、生活寮が作り続けられ、『地域交流』が日常的に行われてさえいれば、今のような働きをスタッフに強いことは決してないと断言できるのです。

どうして、これだけのお金が施設に入っていて、たった2つの事業しか行われなかったか。そのお金は、何処に使われていたのか。スタッフは、それは可笑しいと感じても、人情としては、しょうがなかったのだと思います。

しかし、このことは単に『愛成学園』だけでなく、全国的に入所更生施設というところでは、特に珍しいことではない事実かも知れません。

知的障害福祉に関わるようになってほんの僅かな私が施設長という立場になり、そして『愛成学園』を知るようになり、今正直に申し上げたいのは、スタッフ一人一人はとことんエネルギーであり、メンバーの人としての誇りを支えようと身を粉にして努力しています。10年の時間を僅かな間で取り戻そうと。この姿勢は凄いことです。ひょっとして奇跡かも知れません。だから、有りがたい。

『くりっく』『地域支援』、そこにお金が流れていても、改革前のお金の流れに比べると圧倒的に価値あるもの。健全です。これは大声で申し上げたい。そして、心からありがとうございます。